

蕭何和韓信

傾向とは逆の動きの重要性

諸將易得耳。至如信者、國士無雙。王必欲長王漢中、無所事信。必欲爭天下、非信無所與計事者

差出人: 山内公認会計士事務所 yamauchi121612@gmail.com

件名: 萧何和韩信

日付: 2023/05/05 16:58:08

宛先: masaki_yamauchi@hotmail.com

萧何和韩信

萧何慧眼识才 韩信被任命为治粟都尉，得以有机会和大总管萧何接触，这是他的幸运。“信数与萧何语，何奇之。”谈的次数多了，

萧何觉得此人有才，有奇才，不得了！

怎么不得了？在萧何看来，韩信有吞吐宇宙、经纬天地之才，在群雄并起的乱世，非此人无以争天下。

可见萧何是站在平定天下这一战略高度去分析、认识这位军事家的才能，从本质上认识他在楚汉相争中的地位和作用的。

这种见识是大胆的，是超前的，实践证明也是准确的。

只有大智大慧者才有这样的卓识和胆识。

因此，我们说萧何的眼睛是一双充满智慧的眼睛。

萧何慧心爱才 韩信有些性急，认为自己已经把用兵思想和理念都给汉王最红的臣宰交了底，想必臣宰早就应该给汉王汇报了，

汉王既然知道了，到现在仍不重用他，

那他在这里待下去也就没什么意义了。

于是，就逃跑了。《史记·淮阴侯列传》有这么一段记载：“何闻信亡，不及以闻。自追之。人有言上曰：‘丞相何亡’，上大怒，如失左右手。

居一二日，何来谒上，上且怒且喜，骂何曰：‘若亡，何也？’

何曰：‘臣不敢亡也，臣追亡者。’上曰：‘若所追者谁何？’曰：‘

韩信也。’上复骂曰：‘诸将亡者以十数，

公无所追，追信，诈也。’何曰：‘诸将易得耳。至如信者，国士无双。

王必欲长王汉中，无所事信，必欲争天下，非信无所与计事者。

顾王策安所决耳。’王曰：‘吾亦欲东耳，安能郁郁久居此乎？’
何曰：‘王计必欲东，能用信，信即留，不能用，信终亡耳。’”
这就是后世流传的萧何追韩信。

这段描写包含三层寓意：其一是他坚信自己对韩信的判断，
悔恨自己在韩信问题上的疏忽，所以时间仓促，来不及跟别人说，
作为丞相身份，亲自追韩信。

至于能否追回，和追回来汉王用与不用，好像是萧何已成竹在胸，
他相信自己的智慧。

其二是萧何怎么样追上韩信，而又怎样劝他回来。《史记·萧相国世家》
及《史记·淮阴侯列传》均未记载。

根据上面提到的“居一二日，何（才）来谒上”，
说明萧何追韩信也费了一番功夫。

民间传说萧何月下追韩信几去几返：第一次追上了，
看见韩信在一个山坡上睡觉，姿势是头向下，脚朝上，
认为信愚，返；回来一想不对劲，又去追，追上以后，
又见韩信脸朝下风头大便，认为信傻，又返回来；
回来还觉得不对劲，就再去追，因此才误了几日。

这个传说不知何据，一是说明萧何费了一番周折，
二是说韩信智慧战胜了萧何智慧，两者都无凭据。
其三是萧何追韩信非常自信，一是说能追上，二是回来肯定能用，
也一定能让汉王重用。

因此，我们说萧何追韩信自始至终是用“心”去追的，
这种用“心”去做的事情基于对韩信大才的爱。
萧何大智荐才 汉王从关东起事，所从者多为关东之人，

称王入蜀后，将士思乡逃亡者甚多。

韩信是从楚投奔过来的无名小卒，又犯法当斩，幸遇夏侯婴不斩而荐，得为治粟都尉小官。在汉王看来，已经很便宜他了，跑了再任命，无甚可惜，有他无他无关紧要。萧何之所以亲自追赶，已经为推荐韩信并为汉王重用做了铺垫。什么人能让丞相这么重视？所以当萧何谒见汉王时，汉王问萧何，萧何回答说，追韩信去了。

刘邦不信，说是萧何“诈也”。继而当汉王问及那么多人逃跑你都不追，唯独就追一个韩信？萧何说“国士无双”。这就把韩信的重要性提到了独一无二的高度。接着又抓住刘邦欲王天下的心理说服汉王，让汉王一下子对韩信产生了浓厚的兴趣，并给予高度重视。

不但要留下来，而且看你的面子封他为将。至此，萧何的荐才目的并没有达到，只封他为将，人不能尽其才。所以萧何说：“虽为将，信必不留。”

王曰：“以为大将。”何曰：“幸甚。”
萧何以其足够的智慧达到了荐人的目的。
用什么方式任命呢？《史记·淮阴侯列传》还有一段记载：“于是王欲召信拜之。”

何曰：‘王素慢无礼，今拜大将如呼小儿耳，此乃信所以去也。王必欲拜之，择良日，斋戒，设坛场，具礼，乃可耳。’王许之。”
萧何说拜将要隆重，要设大礼，以显大王诚意。

否则，你还留不住人。萧何要把一个无名之辈一下子推到三军统帅的宝座上，靠的是什么，靠的是他对两个人的了解：一是对韩信军事才能的了解，此人堪当大任，能成大事。萧何自信自己没走眼，否则也不敢推荐，即使被重用，也恐误大事。二是对汉王的了解，从汉王起事始萧何就一直追随左右，他对汉王的志向、性格特征了如指掌。为霸天下，他不拘一格用才，为王天下，他能够听进别人意见，从善如流。

靠这两点，萧何用他的智慧一步一个脚印，每句话都能打动汉王的心扉。先是亲自追，以示韩信之才非同一般；再言国士无双，明确指出韩信的才能；再说如果只想当汉中王可以让韩信走，如果想王天下，就一定要把他留下来。

这就设了一个机窍，抓住刘邦要王天下的心理，引诱刘邦进入他的圈套，使之不留都不行。留下来再说用，“能用信，信即留，不能用，信终亡耳”。

既然把他留下来，不用留他干什么？继而萧何又说，即使任命为将，他还是不会留在这里。前提是要担当争天下大任，一个普通将官能行吗？逼着汉王说出“以为大将”四个字。萧何荐韩信的描写，虽然没有几句话，但字里行间充满了这位丞相的智慧。

自始至终萧何都处于主动地位，汉王处于被动位置，萧何是巧设机窍，一步一馐，步步为营，汉王是钻进萧何设的机窍，步步后退，最后达到萧何荐贤之目的。这一切都基于萧何对汉王的熟知，但又有谁能说这件事不是“智慧”二字的杰作呢？萧何成就了韩信 韩信称将后，

首先给汉王分析天下形势，指出项羽有三大弱点，一是匹夫之勇，二是妇人之仁，三是失去民心。

看起来很强大，其实很容易变弱。接着献计让汉王东向入关中为王，关中百姓都很恨项羽封的三个降将章邯、司马欣、董翳 [当时项羽从范增计，封刘邦为汉王，王巴蜀汉中，都南郑；封秦降将章邯为雍王，统治咸阳以西，都废丘；封司马欣为塞王，王咸阳以东，都栎阳（今西安市）；封董翳为翟王，王上郡，都高奴（即延安）]。

秦人暴虐，而大王得咸阳后约法三章，你现在在汉中称王，三秦人都很遗憾，如果你入关中称王，秦人都拥护你，支持你，那你夺取关中就很容易了。韩信从统一天下的高度，鞭辟入里地对地域、人事等方面进行了分析，指出了其中的利弊得失，提出了统一天下的政治、军事主张和宏远的战略思想。

汉王非常高兴，自以为得信晚，遂采纳韩信计东击三秦。
汉王元年（公元前206年8月）拜韩信为大将军，率兵出陈仓（今宝鸡市陈仓区），平定三秦。

汉王二年（公元前205年）出函谷关（灵宝）继续东进，收复山西、河南，联合齐、赵，共五十六万军队击楚。四月兵败彭城（徐州），韩信收兵与刘邦会荥阳，楚不得西进。汉王二年八月，以韩信为左丞相袭魏安邑（运城），虏魏王豹。又率兵东进北袭，九月破代兵（现河北蔚县附近）。

汉王三年（公元前204年）与赵军大战井陘口（山西太原附近，在并州东），破赵军，擒赵王歇；听广武君之计，发书燕王，燕王归汉。

汉王四年（公元前203年），东击齐国，齐王田广与楚将龙且率二十万大军救齐。

韩信水淹楚军，杀龙且，楚全军覆没。

汉四年平定齐国。汉五年正月尊汉王令用兵垓下（安徽灵璧县），一举灭楚，建立了不世之功。成就韩信此功者，当是萧何也。

蕭何

この記事には複数の問題があります。[改善](#)や[ノートページ](#)での議論にご協力ください。

- [出典](#)がまったく示されていないか不十分です。内容に関する [文献や情報源](#)が必要です。(2022年1月)
- [独自研究](#)が含まれているおそれがあります。(2022年1月)

出典検索?: ["蕭何" - ニュース・書籍・スカラー・CiNii・J-STAGE・NDL・dlib.jp・ジャパンサーチ・TWL](#)

蕭何（しょうか、[昭襄王50年](#)（[紀元前257年](#)） - [恵帝2年7月5日](#)（[紀元前193年8月16日](#)））は、[秦末](#)から[前漢初期](#)にかけての[政治家](#)。[劉邦](#)の天下統一を輔けた、漢の[三傑](#)の一人。

経歴

楚漢戦争

[劉邦](#)と同じく[泗水郡沛県豊邑](#)の出身で、若い頃から役人をしていた。下役人であったがその仕事ぶりは真面目で能率がよく、評価されていたという。なお[曹参](#)や[夏侯嬰](#)はこの時

蕭何

像 何 蕭



蕭何像（[三才図会](#)）

前漢
相国

出生	不詳 泗水郡沛県豊邑
死去	恵帝2年7月5日 （ 前193年8月16日 ）
諡号	文終侯

の部下にあたる。

爵位 鄭侯

単父の豪族の呂公が敵討ちを避けて沛県に移

子 蕭祿、蕭同（異説あり）、蕭延

[テンプレートを表示](#)

ってきた。県令は歓迎する宴を開き、接待のすべてを蕭何に任せた。参加した人があまりに多すぎたため、蕭何は持参が千銭以下の者は地面に座って貰おうと考えていたところに劉邦が来て、「一万銭」と言った。これを呂公に取り次ぐと、呂公は玄関まで出向いて迎え入れた。蕭何は「劉邦は昔から大ぼら吹きだが、成し遂げたことは少ない（だからこのことも本気にされませんよう）」と言ったが、劉邦の人相を非常に評価した呂公は構わず歓待した。このように、このころは劉邦をあまり高く評価していなかったが、後に劉邦は「豊を立つ時、蕭何だけが多く銭を包んでくれたのだ」と語っており、目をつけてはいたようである。

秦末の動乱期になると、反乱軍の優勢さに秦政府から派遣されていた県令が動揺、そこに曹参等と共に「秦の役員である県令では誰も従わない。劉邦を旗頭にして反乱に参加すべき」と進言。一旦は受け入れられたものの県令は気が変わって劉邦を城市に入れなかったため、沛県城でクーデターを起こし県令を殺害、劉邦を後釜の県令に迎えた。以降、劉邦陣営における内部事務の一切を取り仕切り、やがて劉邦が項梁・項羽を中心とした反秦陣営に加わり各地を転戦するようになると、その糧秣の差配を担当してこれを途絶させず、兵士を略奪に走らせることがなかった。また、劉邦が秦の都咸陽を占領した時には、他の者が宝物殿などに殺到する中、ただ一人秦の歴史書や法律、各国の人口記録などが保管されている文書殿に走り、項羽による破壊の前に全て持ち帰ることに成功した。これが漢王朝の基礎作りに役立ったと言われている。

紀元前206年、秦が滅亡し、劉邦が漢王に封建されると、蕭何は丞相に任命され、内政の一切を担当することになる。

それからまもなく夏侯嬰が韓信を推挙してきた。その才能に感じ入った蕭何も劉邦に推挙し、韓信は召し抱えられたが、与えられた役職が閑職だったために逃げ出すという事件を起こす。韓信を引き留

めるため蕭何は自ら追いかけて、「今度推挙して駄目であれば、私も漢を捨てる」とまで言って説得する。そして劉邦に韓信を [大將軍](#) に就かせるよう推挙した^[1]。劉邦はその進言を受け入れ、大將軍に任命する。韓信は家柄も名声も無く、元は [楚](#) の雑兵で、漢でも単なる一兵卒だった。当然ながら最大級の大抜擢であり、このことから劉邦の蕭何への信頼の厚さが伺える。

劉邦が軍勢を率いて [関中](#) に入ると、蕭何もこれに従い関中に入る。[楚漢戦争](#) が激化し、劉邦が戦地に出て関中を留守にすると、王太子の [劉盈](#) を補佐しながらその留守を守った。関中においてもその行政手腕は遺憾なく発揮され、関中から戦地に向けて食糧と兵士を送り、それを途絶えさせることなく劉邦を後方から支え、しかも関中の民衆を苦しめることもなく、名丞相として称えられた。[紀元前202年](#)、楚漢戦争が劉邦陣営の勝利に終わると、戦功第一には、戦地で戦い続けた將軍らを差し置いて蕭何が選ばれた。劉邦も、蕭何の送り続けた兵糧と兵士がなければ、そして根拠地である関中が安定していなければ、負け続けても何度も立て直すことはできず、最終的に勝利することもできなかったことを理解していたのである。

漢の相国

劉邦が [皇帝](#) となり、前漢が成立すると、蕭何は戦功第一の鄼侯に封じられ、引き続き丞相として政務を担当することとなり、長年打ち続いた戦乱で荒れ果てた国土の復興に従事することとなった。[紀元前196年](#) に、[呂后](#) から韓信が謀反を企てていることを知ると、密談を重ねて策謀を用いて誘い出しこれを討った。韓信は [国土無双](#) と称された程の名將であり、慎重でもあったが、蕭何だけは信用していたために油断したのである。この功績により、臣下としては最高位の [相国](#) に任命され、「劍履上殿^[2]」「入朝不趨^[3]」「謁賛不名^[4]」等の特権を与えられた。

しかし、この頃から劉邦は蕭何にも疑惑の目を向け始めた。これについては楚漢戦争の頃からその傾向があったため、蕭何もそれを察し、戦争に参加出来る身内を全員戦場へ送りだし、謀反の気が全く

無いことを示していた。しかし、劉邦は皇帝となつてからは猜疑心が強くなり、また韓信を始めとする元勲達が相次いで反乱を起こしたことで、蕭何に対しても疑いの目を向けたのである。長年にわたって関中を守り、民衆からの信望が厚く、その気になればいとも簡単に関中を掌握できることも、危険視される要因になった。蕭何は部下の助言を容れて、わざと悪政を行つて（田畑を買い漁り、汚く金儲けをした）自らの評判を落としたり、財産を国庫に寄付することで、一時期投獄されることはあったものの、何とか肅清を逃れることに成功した。

劉邦の死の2年後、蕭何も後を追うように亡くなり、文終侯と諡されて、子の哀侯蕭禄が後を継いだ。蕭何の家系は何度も断絶しているが、すぐに皇帝の命令で見つけ出された子孫が侯を継いでいる（後述）。

死に際して後継として曹参を指名している。のちに曹参は、政務を怠っていると非難されたとき、「高祖と蕭何の定めた法令は明瞭明白で世を治めており、変える必要がありません。我々はあまり細々とした変更をせず、それをただ守れば良いのです」と時の皇帝に述べ、皇帝もその言葉に納得している。

漢王朝において、臣下としての最高位である「相国」は一部の例外を除いて蕭何と曹参以外には与えられず、「それだけの功績のものがいない」として任ぜられることがなかった。

子孫

哀侯蕭禄は6年で逝去し、子がなかったので呂后は彼の弟の蕭同^[5]を継がせたが、[紀元前179年](#)に蕭同は罪を得て、爵位を奪われた。そこで、蕭何の末子の筑陽侯蕭延を継がせた。定侯蕭延は2年で亡くなり、その子の煬侯蕭遺が継いだ。彼は1年で亡くなり、子がいないためにその弟の蕭則が継いだ。20年後に酈侯蕭則是罪を得て、所領を没収された。

しかし、[景帝](#)は詔を下して「大功臣の蕭何の家系を断絶するのは忍

びない」として、蕭則の弟の蕭嘉を武陽侯として封じて再興された。彼は7年で逝去し、その子の蕭勝が継いだ。彼は武帝の時期の21年で罪を得て、所領を没収された。しかし、武帝も父同様に詔を下して、蕭則の子の共侯蕭慶を鄼侯に封じた。彼は3年で亡くなり、その子の蕭寿成が継いだ。10年で彼は罪を得て、所領を没収された。

宣帝の時期に、詔を発して蕭何の子孫を探し出して、その子孫である釐侯蕭喜を鄼侯に封じて三度再興させた。彼は3年で亡くなり、その子の質侯蕭尊が継いだ。彼は5年で亡くなり、その子の蕭章が継いだが、子がなく兄弟の蕭禹が継いだ。王莽が漢を篡奪して新を樹立すると、王莽は蕭禹を鄼郷侯に改めて封じた。王莽が後漢の光武帝によって滅ぼされると、鄼郷侯も断絶した。

明帝と章帝は詔を下して、蕭何を祀らせた。和帝の時期に、詔を下して、蕭何の子孫を探し当てて、見つけ出して領地を与えた。このように蕭何の子孫は前漢・後漢にまで繁栄した。

さらに、南朝の齊を建国した蕭道成は蕭何の24世の子孫、蕭道成の子孫である梁を建国した蕭衍も蕭何の25世の子孫であると称していた。

評価

司馬遷は史記の蕭相国世家にて、「蕭何は秦の時代では小吏にすぎず、平凡で優れた能力はなかった。漢がおこると高祖（劉邦）の余光に頼り、留守の役をつとめ秦の憎悪を利用して、新しい時代を作った。韓信、英布が粛清されたが、蕭何の勲功は光輝き、地位は群臣の上に置かれ、名声は後世まで流れ、閔天、散宜生と言った周王朝の功臣達と功績を争うようになった」と評している。^[6]

蕭何を題材とした作品

- 楚漢名臣列伝（小説、宮城谷昌光、文藝春秋）

脚注